雪のおもしろき朝

辻　憲男（文学部教授）

枕草子の雪から、徒然草の一節を思い出した人もあろうか。数年前、中学校の実習授業を見て、教室でこんな風雅を扱うのかと感心した。「雪のおもしろう降りたりし朝（あした）、人のがり言ふべきことありて文をやるとて、雪のこと何とも言はざりし返り事に、『この雪いかが見ると、一筆のたまはせぬほどのひがひがしからむ人の仰せらるること、聞き入るべきかは。返す返す口惜しき御心なり』と言ひたりしこそ、をかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れがたし」。用向きだけの手紙のつまらなさを難じた、今は亡き人。秋の月の美しいころ訪ねたことがあった。辞去して物陰からそっとうかがうと、その人は「妻戸を今少し押しあけて月見る」風情、名残を惜しんでいるのだった。心こまやかな、慕わしい女性であった。はかなき事ながら、若き日の兼好の王朝趣味が思われる。

隠者の女性観は偏屈ではあるが、美しいシーンにもあこがれた。消え残った雪が凍る夜、「さし寄せたる車の轅（ながえ）も霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬ」、御堂の廊に、上品な男女が腰かけて話をしている。うつむいた女の髪や顔形もいい感じで、えも言わぬ薫りがさっと匂い来て、言葉のとぎれとぎれに聞こえるのも心ひかれる。

おそろしいのは雪仏の喩え。「人間の営み合へるわざを見るに、春の日に雪仏を造りて、そのために金銀珠玉の飾りを営み、堂を建てむとするに似たり」。完成を待って安置できるかどうか。消えぬ間に為すべき事が多い。

右京区花園の法金剛院。兼好の庵は背後、双が丘の谷にあったという。
上の徒然草の章段は31、32、105、166。